

学校舞踊の創作に関する諸問題（Ⅲ）

碓 井 エ イ

Ei USUI: Problems in the Creation of the School Dance

は じ め に

学校における創作舞踊方法論については、最近になって特に適切な問題解明に接近する方向をみせている。その一例をあげてみると、小学校低学年・中学年より「表現・創作作品の早づくり」が提唱されて、グループ学習活動の発達に則した段階的あり方や主体的練習法、または表現題材に適した内容の表わし方などの学習指導の技術が早急に求められようとしている。さらに小学校高学年においては子供たちの基礎技能を高めるねらいから、phrase を中心にした技能の獲得を期待して、これによって児童・生徒たちの表現・創作活動を容易にそして潤沢に伸展させようとする試みがみられている。今回はこの phrase を中心にした創作方法上の問題点について考察を加える。また既報「学校舞踊の創作に関する諸問題〔1〕」で今後の課題のひとつとして述べた「表現内容のとらえ方」について幾つかの事例をあげて考察する。

最近には島根県内は勿論のこと全国的に各界の創作舞踊発表会が開催されて、鑑賞を契機とする創作法の理論的究明がいよいよ熱意を帯びてきている。そして本年度末には教育系国立大学二十二校による全国的創作舞踊発表研究会が新しい方策で試みられようとしているので、島大創作舞踊研究班も参加を企画している。過去には昭和44年女子体育連盟主催第一回日本体育実技研究発表会に出演し、本年二月には長崎県立女子短期大学との研究交流を実施したり、去る六月には待望の第二回独立公演を島根県民会館で行なった。創作活動は言うに言われぬ程の困難を伴うのが現実であるが、作品は一作毎に動いて楽しく観て楽しい結果を生んでいると言ってよかろう。この鑑賞を意図して練りあげられた創作作品に対して技術構造要因を分析して、phrase の構成展開に関連する問題点について考察を加えてみる。

I 研究の方法

(1) 既報「学校舞踊の創作に関する諸問題Ⅱ」の研究手法のひとつであった昭和46年5月21・22・28・29日に、島大附属中学校において実施された教生学習指導を観察記録し、引き続き学習活動七週目の生徒相互鑑賞時に団道子指導教官と教生一名が、二台の8mmカメラで収録し、同教官がフィルム編集を行なった。これを8mmエジターで作品構造技術の諸要因を分析し

て報告する。

(2) 昭和46年前期舞踊Ⅰの講義内容であった課題式小作品「貝の夢」——(7月7日)——を即興的に創作する過程で、各グループの話し合いによって纏められた作品内容から「内容のとらえ方」に関する問題点を探ってみる。また関連する事項についてはS44年・S45年に創作された個人作品の幾つかをあげて比較考察に具えた。

(3) 創作舞踊班の独立公演に備えて作品構成過程を再吟味するねらいから、小玉耕平助教授に依頼してビデオテープ撮りを行なった。この諸作品のひとつである「死にゆく人々の空間」のフレーズ要因と空間構成のありかたを分析して考察を加えた。またこのような作品発表会に際して、一般鑑賞者はどのような視点から鑑賞するかを知るために、第一回・第二回独立公演で行なったアンケート結果について簡単に報告する。

Ⅱ 研究 課 程

〔1〕 中学校一年生のダンス創作活動と創作技術構造について。

はじめに、学校関係の創作ダンス発表会が多くなったと述べたが、これについては全国的にみても小・中・高・大学のなかで中学校の作品発表が特に少いのが或る種の問題点になっている。この状態は勿論、教員配置関係、カリキュラムから体育教育全般にからむ問題が多いとみられている。これらの現状のなかで島大附中の創作活動学習は、小集団学習研究が実って以前から充実した学習内容が認められている。

今回は「花」の単一課題方式による比較的容易に取り組める題材選択法である。12グループの題材は ①朝顔 ②鈴蘭 ③雑草 ④水蓮 ⑤鈴蘭とたんぽぽ ⑥紫陽花 ⑦日向葵 ⑧たんぽぽ ⑨桃色の花の踊り ⑩アイリス ⑪チューリップ ⑫野薔薇

と決定されているが、まったく中学校期一年次の発達段階に適した選択と考えてよからう。この決定の過程では「紫陽花と蝸牛」の蝸牛が指導助言によって、ようやく学習二週目に姿を消したのに対して、「鈴蘭とたんぽぽ」はグループ構成の人的関係が影響して、最後まで二つの類似する内容表現を押し通す学習活動になっている。そして鑑賞時に行なった生徒相互評価の結果は、①動きは身体を十分に使った美しい動きである。②場の工夫・隊型などの工夫。以上の二項目は中位であったが、③題材・内容の特徴が表わされた動きに対する項目は、普通を少し下廻わる評価に終わった結果からも問題にしなければならない題材の取り扱い方であったと言える。もっともこの題材に関して興味をもった筆者が、創作過程の移行状態を知るために8mmカメラを向けたのが心理的圧迫になったのではないかと推察できる点もないではない。(既報Ⅰの「Ⅳおわりに」の項に学習の導入段階・基本練習の取り扱い方・学習指導過程の状況などについて簡単に述べている。)

この項では創作上の表現傾向をみるために (1)各作品にみられる空間構成の実際について (2)選択され易い各種運動要因について (3)各種運動要因選択の特徴について (4)創作技術にみられる特徴としてあげられる事柄などについて説明する。

一表 中学1年に選択される創作上の空間構成法

作品	類別	中心のある円				一重円		二重円	密集円	移動	並列	群の要素分散	三方向の位置	三重円
		円周上向	円外向	円心向	円心円外交互	円心向	円外向							
①						1.3.6	4	2	5	7				
②						1.4.6			2	5		3		
③		3									5.6	1.2.4		
④		2	5	1.4				3						
⑤		3.5					4				1	2.6		
⑥		3				2		1	4					
⑦						1.4	2	3						
⑧						1.2		3	4					
⑨				1		3						2		
⑩								3						1.2
⑪		2	4	1				3		5		6		
⑫					3	4		2					1	

(一表)は生徒達の記録ノートに載せられたものであるが、各フレーズの最初のリズムパターンが静止の状態にある隊型が示されているのが多く、移動過程を適切にとらえるのが困難な作業のようである。課題「花」の学習指導は七時間計画で実施されているが、⁽³⁾全習的取り扱い方で「表わし方」の学習を三時間行なっている。その内容は ①運動に表現性をもたせる。②内容に適切な動きをみつける。③集団性を理解するの三点が強調されている。題材決定による表わしたい内容は「花の一生」「花の一日の様子」など花の開花から散る過程を表現したのが10グループあり、花卉が散る様子を表現した1グループ、また踏まれても立ちあがる雑草を創作した1グループとなっている。

8mmフィルムの題字は「私たちの花」となっているが、花の題材であれば団教官が指摘した次の問題点が当然浮かびあがってくる。①円または円型による隊型のものが多い。②場の使い方の変化にとぼしい。——円の開閉・円周上を回わるものなどが多い。③最初と最後の隊型の動きが同じグループが多い。④動きの変化にとぼしい。(①の問題点に関しては既報ⅠのP.116に関連する内容を書いている。) (一表)によると84.5%が何らかの円型または円型の応用型を表現技術として活用した学習になり、さらに厳密に分析する場合は多少上廻わる数字がでる結果も予想できるのである。

(1) 各作品にみられる空間構成の実際について。番号は各作品順を示す。(以下同様)

① 後進による円の拡大、橢円の交互移動、円の縮小と拡大、終止のための分散。

② 同一場所における水準と動きのリズムの変化連続展開、円の縮小と拡大、円のジグザグ前進、円の縮小と拡大、円の縮小、分散。

- ③ 同一場所、斜右前方前進、同一場所、拡大された円周上の前進、同一場所。
- ④ 同一場所、円周上左方移動、円の縮小と拡大、円外向きの同一場、同一場所。
- ⑤ 1 : 6 の正面向並列による同一場所、同一場と円心向き移動、同一場、円周上の前進、同一場と円の縮小と拡大反復、同一場（拡大された円周上と点）
- ⑥ 同一場（小円の円心向）、円の拡大、同一場、円周上左右移動と同一場。
- ⑦ 二重円二要素による同一場、交互移動による円の縮小と拡大、円型前進、円の縮小と拡大、同一場の二要素と一要素の変化、小範囲の離散と集合の反復。
- ⑧ 同一場、円周上の小移動、放射線上の円の拡大と縮小、円心向き同一場、円の縮小と拡大、同一場の自転と保持、離散。
- ⑨ 二要素による同一場、円の拡大と縮小、軸回転、円の縮小と拡大、円周上左方移動、離散。
- ⑩ 三要素による同一場、同一場と床上横転移動による分散、二要素による並列でその場と左右移動、円周上右廻り前進、左右自由移動と床上左右移動、終止のための三要素による変化。
- ⑪ 円心向小円による同一場、同一場、円の縮小と拡大、円心向き同一場、円の縮小、離散、三要素による同一場、同一場所。
- ⑫ 三方位と中心点による同一場、中心自転と同一場、八の字移動、円周上前進、同一場、同一場所。

以上は各作品に活用された空間構成法をおおまかにとらえたもので、反復回数や細かい変化は省略している。然し題材のもつ特殊な性格から77.5%が円的径路傾向をもつ集団であるといえる。この問題に関連する報告は既報Ⅰにおいても行なっているので次に参考にあげてみる。

県立出雲商業高校1年（指導者は本田紗紀恵教諭）と本学部舞踊Ⅰ受講生の各グループに対する自由題材による創作作品を比較した場合は、円的径路傾向と線的径路傾向の要素数は20 : 23に対し、26 : 22と殆んど変らない移動内容傾向にある実態があった。今回の調査では55 : 17の選択要素数が示すように円的径路傾向の特徴が強くでている。そこで線的径路傾向をもつ表現技術が変化の美の方向へはたらく強い要因になる事実が理解できると言える。

(2) 運動要因を中心にした作品構成法について。

フィルム分析による各種運動要因を作品毎に活用した順位に重複を避けて説明する。

- ① 歩と両腕の体前回旋、ツーステップ、両腕上挙によるポーズ、連手上挙と両腕小波動、連手と片足バランスによる体の前倒と後倒、走とポーズ、上体前屈。
- ② 両腕回旋、片腕上挙より両腕上挙（左右相称的でないリズムが新鮮である。）両腕上挙による保持、両腕体前小回旋と走、自転を伴う走と両腕上挙保持、片立膝体前屈と両腕体前振動、体前屈より腕上方伸展（♩の珍らしいリズムになって終止パターンを引き締める。）
- ③ 片腕上方伸と上体前屈（反復型は片腕上挙より両腕上挙となり良好なフレーズになる。）斜右前方に前進走と跳躍の結合、両腕体前大回旋は体の前屈後倒を伴う。両腕上挙の跳躍、歩を伴う両膝屈伸と片腕上挙（漸進的なフレーズ展開になる。）両腕の斜上挙伸。

④ 両腕上挙振動、反動を伴う両腕後方回旋と体前屈、片立膝の両腕回旋より立位による両腕上挙伸、床上V字保持と体後屈（動きの軌跡が特に大で流動的になる。）、送り足と片足後挙跳躍、連手上挙より側下方に振る動きに伴う歩、体側倒（中心）と片腕交互回旋を伴う自転と片立膝による片足後挙バランス、両腕体前波動の上方下方移行、波動の上下動を伴う自転。

⑤ 両腕斜上伸による全身的波動（反復が多くよく纏まる要因である。）と片立膝による体前屈、爪先立移動と両腕体前振動、両腕回旋と自転を伴う走、前進走と両足踏み切り跳躍の結合と後進走、片立膝による a 体前屈保持と b 両腕流動的回旋（中心点 b の動きは軌跡が複雑で美しいリズム・フレーズになっているが、円周上に等間隔に位置する a との配置関係では表現性が稀薄になりがちで惜まれる。）

⑥ 片腕上挙体後屈は二群で交代に行なう。体後屈と上体振動、両腕振動（斜上方振より側下方振）と体後屈より全員の同時後屈、後進歩と体後倒保持および両腕上挙体後屈、片足後挙体前倒による両腕体前小回旋連続（このリズム連続は面白いが、前後フレーズへの連続や展開に関連がみられず惜まれる。）、体前倒保持と両腕の側回旋を伴う跳躍。

⑦ 両立膝・片立膝による体前屈より両腕振動（体の斜上方）と両腕回旋、両膝付体前屈、膝・足首の反動を伴う上体上下振動と上体左右振動、ツーステップと自転、ツーステップと前進後進、後進ツーステップと自転、ツーステップと両腕上挙、肘を曲げた連手による体の後倒と前倒および両足開脚跳、大連手と小連手、片立膝と体前屈、片足後挙体前倒、方向変換を伴う両腕側伸、両腕側挙と開脚によるポーズ、両腕側回旋とツーステップ、両腕上挙保持。

⑧ 両立膝による両腕左右振動、左右爪先ポイントの軽跳躍、前後連続両足跳、ステップターンと体前倒のポーズ、片腕上挙、片腕回旋、連手による体後屈と連手上挙、片腕後方よりの回旋、ホップおよびスキップ、自転に結合するポーズ（上体前傾で両腕を側下方に伸ばすポーズは可憐さはあるが幾らかぎくしゃくして惜しい。）、体前屈保持、両腕上挙回旋、自転を伴う移動、両手を胸前にかざすポーズ（片足後挙）。

⑨ 両腕上方波動（柔軟度が強く美しい連続になる。）、床上の体完全前屈、連手による体後屈、ヒール・トウと反復膝振り跳（若さに溢れるリズム）、片腕内外旋、ワルツラン風の軽い跳躍を伴う走（アクセントを強調して躍動的移動になる。）、自転とステップターンの結合、終止のための床上伏臥。

⑩ 両手を上体の後方で結ぶ上体の左右振動、両腕の上方左右振動、体前倒保持および自転と反自転、自転の反復と反対方向への自転三回連続、床上横転、両腕側回旋を伴うステップターン、体の斜前傾、反動を活用した漸進的立位、両膝立による片腕上挙反復と両腕上挙、両腕左右振動と自転、両腕左右振動と跳躍、両腕回旋とホップ・ポルカ・ステップターン、カッティング（作品の「やま」の部分に一回みられる。）、両腕上挙連続自転、走と跳躍の結合、点の左右振動および体前屈と体上方伸展、上体の脱力、床上前屈保持と横臥。以上のように群の三要素的動きの取り扱い方は、一・二要素に比較して相当量の複雑さを増している。

⑪ 片足後挙バランスと座位前屈による二要素的变化, 座位の体後屈から漸強の表現的リズムで立位になり連手上挙による体後屈, 連手の漸進上挙と急激な上挙開及び漸進的全屈と急激な体後屈(連手は側下伸), 中心自転とツーステップ, 両腕交互連手による首の振動, 自転を伴う円の拡大と縮小, 仰臥より上体前屈, 両立膝による両腕の体前八の字回旋, 連手上挙と下方振, 両手先の細かい波動, 自転を伴う走と連続自転, 両立膝による連手交互上方伸, 体後屈, 自転を伴う移動回転, 床上伏臥。

⑫ 片立膝による片腕交互回旋と両腕回旋, 自転, 連続自転, 片足後挙体前倒, 両手を胸にがさず片足後挙体前倒, スキップによる移動回転, 両腕上挙と上体前屈, 連手上挙後屈, ワルツラン, 自転を伴う移動回転, 床上伏臥。

以上は各フレーズにみられる主要運動要因をあげたのであるが, 各作品毎の選択巾は8種から15種類となり, 全作品からみれば28種類の要因を選択して作品構成に具えている現状である。この運動要因の選択巾は島大舞踊Ⅰ受講生にみられる個人創作作品の特体課程一年男子作品に取り上げられている選択巾に類似するタイプとみてよい。このような類似点は使用頻数の高い運動要因の順位にもみられている。

各種運動要因中使用頻度の高い要因を次にあげてみる。①上体前屈(片立膝・両膝付・長座・伏臥など種類が多いのも特色になる。), ②上肢上挙, ③上肢回旋(前方回旋・後方回旋・腕交互回旋・八の字回旋・側回旋など), ④跳躍 ⑤自転 ⑥振動 ⑦膝立 ⑧倒 ⑨体後屈 ⑩床上活用 これらの要因を上位六種を前記舞踊Ⅰ受講生の選択要因と比較してみると, 特別体育専攻生女子は上肢上挙だけが類似し, 一般女子は上肢上挙と上肢回旋が類似する選択としてあげられる。これに対して男子専攻生一年は跳躍・上肢上挙・膝立・移動回転・上肢回旋と類似点の接近がみられ, 中学校期の発達段階に即した身体的機能的発育の顕著さがみられると考察できる。然し舞踊創作の高度な技術に属している下肢回旋・背面前進・toe・重心移動・弾力・下肢挙振・リープターン, 押引, 転位などの各種要因が作品中にみられない実際も特色のひとつである。また大学生の選択運動種類が34種に対して中学一年は28種類となっている。この28種のうち脱力・8の字回転・上肢波動・カッティングなどは極めて使用度が低いので, 実際に活用される運動要因はさらに減少する傾向をみせている。

(3) 各種運動要因選択の特色について。

グループ創作活動において活用される空間は, 体育館の広さやグループ数によって著しい制約を受けることになる。特に今回の学習課題は「花」であるので表現の性格上からいっても, 空間構成上の制約がはたらきかけている諸要因が幾つかみられている。これを ④水準の変化 ⑤カノンの取り扱い方 ⑥作品の特殊性 の三項目に分け作品毎に述べる。

① ④ ア 円心向きの二要素は立位と片立膝。イ 終止型は床上伏臥・中腰・立位。⑤ 終止へ活用する。⑥ ア 終止へのカノン風分散は突然のようにみられる変化連続で多少適切を欠いている。イ フレーズの取り扱い方の短い点が惜しまれるが連続はスムーズである。この連続

性は第二フレーズにみられる橢円の移動を交代反復する際に「つなぎ」の動きを使用した結果生じているとみられる。この「つなぎ」の良い連続性は中学校期以後の創作によく出現する手法でなる。

② ④ 片立膝より立位と片立膝による体上伸の二要素。⑤ 正面向三方位の位置における4呼のカノン風取り扱いは、正面を意識し過ぎて動きのリズムが単純になり、表現性を弱める結果になっている。⑥ ア 床上伏臥より両立膝になるモチーフが始めの展開を良好にしている。イ 第二フレーズの個の自転を伴う移動は、全作品中ただひとつの手法となっている。ウ リズムパターンの反復にリズムの変化がみられている。エ 体前屈より頭上への上肢伸展は♪♪♪で良好なリズムとなって終止を引き締めている。然しこのような良いリズムを反復して最上のフレーズに展開する方法は未だ理解できないようである。結局これらのリズム・フレーズ構成を客観視する機会が練習の過程で必要になってくる。オ 両腕上拳を主にしたリズムが反復されて、類似・漸進的感觉を部分的に与えている。

③ ④ 二群要素の変化は⑤のカノン風も感じさせている。⑥ 終止への活用で低い片立膝・中腰・立位の変化にみられるが、全作品の手法にみられるように、安定を欠く呼数の運び方が惜しまれる。⑦ 全作品に比較して移動の方法が最も漸新で踊跡が特に大であり、動きのモチーフ連続活用（フレーズ構成）に無理を感じさせない良さがある。然し終止へ連続する過程である準円周上にみられる斉一的な一列前進は、動きのモチーフへの反復活用であるが、全般的にみて表現性を減少しているという見方でもできるのである。

④ ④ ア 長座と両立膝よりの立位。イ 床上V字保持に対する跳躍と立位。ウ 床上体前屈・片立膝・立位。⑤ ア 床上体前屈と後屈（花の開花表現とする活用が最も多い。）の軌跡が大であるのが表現性を豊かにしている。イ 円心に対する円型の変化である三要素活用がよく理解されている。ウ フレーズの連続がスムーズで特に長座組の変化・連続に注意がゆきとどいている。

⑤ ④個に対する群といえる1:6の場の取り扱い方で、個の立位と片立膝による水準の変化は特に優れている。⑥ ア 第一フレーズは完全な8呼間のカノンの取り扱い方になり、1人・2人・3人と動きのリズムを追いかけて優れている。然し終りの呼数の整え方に曖昧さともみられる2呼間の短縮があって惜しまれる。勿論この曖昧さは学習活動として行なわれる模倣・表現・創作作品全般にみられるのが普通であって、時にはこの自由なリズムの取り扱い方が、グループ活動のなかにおける自己表現を一層楽しくする誘因になるのであるとも考えている。イ 両腕回旋を伴う自転による走法は、次次動き始める感じで一斉的リズムを感じさせている。⑦ ア 自転を伴う前進走は全体的な纏りを欠いているが、各自が自由に行なう連続を観察する場合は、前に述べた曖昧さのなかにみられる或る種の調和的リズムを発見できておもしろい。またこれらの自転を伴う移動にはスピード感がみられて立体的手法となっている。イ 各種運動要因の項でも述べたように、終止型である円中心に位置を示める個の動きの

流動性は特に優れてはいるが、他に成員達によって拡大された円周上での場のとり方は、分散が過剰になって作品の統一を悪くしている。

⑥ ④ 後進歩に続く体後倒保持と両腕上挙体後屈。⑤ 第五フレーズにみられる体前倒保持と両腕側回旋を伴う跳躍に4呼間の差がある。⑦ ア 三人は円心向きで片腕上挙のポーズになり、他は円周上を左方へ腕側旋を伴う移動を行なうが、変化の方向にはたらく要因が多くみられている。

⑦ ④ ア 第一フレーズの開始にみられる全身体前屈より両立膝・片立膝になり、さらに片立膝と立位の変化になる。イ 最終フレーズにみられる体前屈に対する片足後挙体前倒がある。⑤ 個人による方向変換両腕側方伸と 両腕側挙開脚ポーズを 次次動く場合は、1呼風カノンと同時に高さの変化もみられておもしろい。⑦ フレーズ構成が種種考えられて豊かなリズムの内容がみられるが、連続発展過程には移行が不自然で良い連続にならない。

⑧ ④ 二回転を伴う 移動で円の離散があり、一群は片足V字になり他は立位のポーズになる。⑤ ア 一呼風カノンが円心向一重円(片立膝による連手)で各種リズムを連続反復する。連手の片腕上挙・体全屈と両腕上挙・連手上挙・片腕回旋などが更に反復されるが総べてに二タクト一動作に統一される反復がみられて、リズムの妙味を減少する結果になっている。イ カノン式自転で顔を上方に向けるポーズは良く工夫されて可憐でもある。ウ ステップターンと体前傾のポーズは4+4の優れたリズムになっている。⑦ 長短・リズムパターンの良否はあるが、構成されたフレーズも多く、生徒相互評価の結果は上位に位置する作品になっている。この相互評価は⑧の作品が最も高く⑦も同様上位にある。

⑨ ④ 全身体前屈よりAグループの二人が両腕上挙の美しい波動後、Bグループが反復を行ない、さらにAグループの再反復後全員による連手体後屈は、高さの変化とカノン風の良さがみられている。⑤ 終止パターンは離散による床上伏臥である。⑦ ワルツランの左方移動は特に力動感に溢れ、全員が力を合わせ呼吸を合わせる跳躍が生き生きとしている。

⑩ ④ ア 三要素の動きの群になり、中心の自転と反自転・床上横転・自転に軽い跳躍の加わる移動は水準の変化の要素が大である。イ 二要素群の正面向並列になり、左右の振動に自転を加え、両立膝の前屈と片腕上方伸は、水準の変化と共に点と移動の変化も加わっている。⑤ 終止型はカノン風の脱力を活用して三段階に動きのリズムを追い、床上伏臥と立位の完全脱力が良好な終止となっている。⑦ ア 円心向きの二要素・三要素が連続されているが、第四フレーズが単純な円周上の跳躍前進となり、また三要素の動きが発展的に連続されている。然しこの連続のなかで第四フレーズへの移行が急変すぎて動く生徒達も慌てふためくリズムがみられて惜しい。良い連続は動く自身にとっても、また動きのリズム・空間移動においても無理なく進展されて自然に統一の方向へ運ぶ性質がなければならない。イ 生徒の相互評価の結果は上位に属している。

⑪ ④ ア 第一フレーズにみられる円心向き片立膝つきの片足後挙に対する立位による片足後挙。イ 第三フレーズにみられる中心自転で連手片立膝による首の左右曲げ。ウ 第四フレー

ズの長座による仰臥と体前屈および両立膝による両腕八の字回旋。⑩ 終止型である密集より自転を伴う移動に続く床上伏臥は8呼間のカノン風となる。⑪ 珍らしく漸強・漸弱のリズムを活用したり、変った細かい波動なども面白いが、余りにも画一的なフレーズの長さの結合連続に折角のリズム効果を生かしきれない点が惜しまれる。

⑫ ア 中心に対する二人構成の三方位は高さの変化が容易で次の変化が現われる。中心の立位・周辺が立位になって片足後挙バランス、また三要素の円陣になるなどもみられる。

イ 中心が連続自転を行ない他は円周上前進走で高低の変化をつける。ウ 円心は立位による上体前屈腕斜上挙に対して他は片立膝で連手を上方下方に振る。⑬ 第一フレーズで三方位の場に位置する二人宛が、それぞれ片腕交互回旋を行なう。イ 終止型の円陣ワルツランより4呼間のカノン風取り扱いによる自転後の片立膝体前屈は新しいリズムであるが、七回続く反復は多少もたつきをみせている。⑭ 変化のある隊型で動き始めたり、円周上を個がデグザグ前進をするフレーズなどは蔓薔薇と混同しているような感じを与えている。

(4) 創作技術にみられる全般的な特徴について。

各グループが課題方式により同一場所において創作する場合は、その作品構成内容に類似する要素が多くなるのが普通の現象になっている。創作初期においては一層この傾向が強くなるのが一つの問題点であるが、各グループの練習の要点として次の創作活動に大きな期待がもてるようになるのである。

(1) 課題から制約を受けた移動径路は、一重円・二重円・中心のある三重円要素のリズムパターン・フレーズが工夫されて、一応良い作品構成法を理解していると言える。さらにこれらは群舞の時間構成・空間構成・フレーズ構成の基本的練習に参考になる要素が多いとみてよい。

(2) 各作品にみられるフレーズ構成は類似的・漸進的反復に乏しいため、全品全体の始め・やま・終止の連続的效果を減少している。然し各フレーズには確かなリズムパターンがみられるので、独立的なフレーズを構成する表現技術をもっているとみられる。この独立的なフレーズ構成技術は大学生の自由課題による個人作品にも現われる特徴的事柄になっている。ただこれらのフレーズが題材のもつ表現内容に直接繋がるリズム・フレーズである場合は少しも問題にならない。そして誰がみても表現内容と動きの連続が密着していると感じられる場合は問題にはならないのである。

(3) 8呼間・4呼間間隔を主にするカノン風取り扱いは少ないが、1呼間の動きを次次追いかける技法は十分浸透している。然し表現技術としては優劣の巾が認められるので、次時の全習のありかたが重要になってくる。また選択するリズムパターンのなかには、日頃あこがれを抱いているリズム・カッコよいリズムやポーズを好む傾向が多く、また両立膝つきの角度の種々・床上完全伏臥や横臥・床上横転など少しは恰好が悪くても全身的に素朴に打ち込む活動の傾向もみられて好ましい。

(4) 花が開く、小さい花々が揺れる、花が静かな風に吹かれて散る、激しく惜しみなく散る

などのリズムは、1・2・1・2の反復や1234・1234の単純な反復では表現にならないリズムの性格をもっている。人間の機械的・斉一的な生理的リズムを脱却しない限り、花のもつ優美華麗な写実表現は望み得ないのである。いかなる表現技法で少しでもその内容に近づくかが問題なのである。作品構成のなかで一フレーズでよいから、この花の特徴とするリズム内容はこれである……という見透しをたてて表現活動に入りたいものである。

(5) 総括的には、中学一年次の創作学習における初歩的段階の目標である「表わしたい感じの特徴をとらえて素描（デッサン）する」表現能力は十分認められると言ってよからう。そして二学年の創作学習の準備段階として、何んとなく創れるフレーズ構成技法を、表わしたい感じに適わしくフレーズを作り、さらに反復・連続させる技法も「集団の動きの変化を重点にする」取り扱い方が重要になってくる。12グループの作品は何れも表現の段階的学習を展開させるに十分な作品内容の諸条件を備えている点を見逃してはならないと考えている。

〔2〕 作品構成過程にみられる「内容のとらえ方」に関する問題点について。

S46年度前期舞踊Ⅰにおける課題式小作品「貝の夢」創作にとりあげられた「内容のとらえ方」を各グループ毎に述べてみる。（ ）内は鑑賞時のメモによる。

① こでまりグループ

貝・魚が楽しく海草や岩の間を泳ぎまわる。海底旅行を始める。ほんの一夜の夢。（構成は三群要素でよく纏まりアクセントの活用が効果的である。）

② 桜貝の夢……美女と野獣グループ

朝日が輝く浜辺で貝が夢をみる。そして陸の生活に憧れる。浜木綿のなかを蝶のように飛びまわり、ひとつの花に止まって蜜を吸っていると花が話しかけた。「蝶さんおいしいですか」「ええとてもおいしいわ」というような楽しい夢でした。

③ クローバーグループ

或る晴れた日の午後、砂浜で小さい貝が「早く私もお母さんのように奇麗で大きな貝になって、どこか遠い国へ行ってみよう」とつぶやきました。（四人がそれぞれ均等に隔てられた場を示めて動く。）

④ 四つ葉グループとジャンプグループ

貝が眠っていました。そのひとつの貝が眼を覚まし、友達の貝も起こして波に乗って海岸に打ちあげられ、遊んでいました。その時は月夜の晩でした。（アイデアは良いが動きの工夫が今少し足りない。）

⑤ コロンズグループ

お日様がにこにこ顔を覗かしてくるなかで、波打際をピンク色をしたひとつの貝が気持よさそうに散歩している。すると蟹がちょこちょこ近づいて来て「今日は」と声をかけた。貝と蟹は光の中で戯れ始めた。

⑥ 海辺の散歩……めだかの学校グループ

蟹が戯れて砂浜に打ちよせる波と追いかけっこ、ふと砂浜に眼をやると、淡いピンクのさくら貝、集めて子供の頃に戻り貝の家を作ってみた。

⑦ 桜貝の夢……まつぼっくりグループ

岸に打ちあげられた桜貝が、海で友達と遊んだ楽しい頃を思い出して夢みていました。

⑧ ブルースカイグループ

貝殻の赤ちゃんが海水に流されて海に漂よい、深い海の底にひらひらと沈んでいった。そこで磯ぎんちゃくや昆布や魚と仲良くなって遊んでいました。（貝殻の動きが良い中心になり全体的な纏まりがみられている。）

⑨ ダンサーズ8グループ

深い深い海の底、青く青く水が澄んで海藻のなかに交ってひとつの真珠貝が眠っていました。綺麗な音楽が流れてきました。真珠貝がそっとそっとまぶたをあげてみました。朝が海の底までいっぱいにいっぱいに清が清がしい。貝は起き出して散歩です。白い貝殻がおもむろに開くと貝を抜きだし海の底の友達の様子をうかがいます。朝を満喫するとまた静かに貝の中に入っていきます。（構成は三群要素を示めし、良好な動きのリズムパターン・フレーズが多い。）

⑩ 断絶グループ

恋に恋する果無い貝殻の心を描く。そして海の底から静かに眼覚め、楽しそうに海藻の合い間をゆらいでいる様子を表わす。（動きのリズムパターン・フレーズが優れている。）

⑪ 花嫁グループ

可愛い貝が海の中を散歩していました。その時向こうからハンサムな貝が現われました。二つの貝は小さな恋に芽ばえました。二つの貝を囲む海の仲間も微笑みながら見守っていました。（リズムパターン・フレーズ構成が良好で連続性もよく全体的纏まりのある優秀作である。）

⑫ まひはみさやこかグループ

貝から貝殻の精がでて魚と戯れる。

ア 貝が閉ちて波に揺れる。イ 貝が開き波にのって海にさまよう……貝の夢。ウ a 初め日の光を避け、だんだん日に向かって進む。貝殻のまわりに集まって回わる。b 貝は夢を見続ける。エ 貝は帰って夢からさめる。（最後までコントラスト手法をとるが、動きの連続に不備な点が多少あって惜しい。）

⑬ プリティ6 グループ 成員中4名が貝になり2名が環境を設定する。

ア 貝が波と共におしゃべりをしながら遊んでいました。でもだんだん眠くなってきました。そこへ昆布達が出てきました。イ 幻想的な場面に入る。そこで貝達は夢で昆布達に会ったような気持になり、一緒になって遊びました。ウ アの情景にかえる。楽しい夢がさめて昆布

はいなくなり、また元通り貝はおしゃべりを始めました。（1：1：1：3の場の構成が良いが、個々の動きのリズムに工夫の欠ける点がみられる。）

——は動きのリズム・フレーズ・役割・情景設定が考えられる内容である。以上13グループの内容設定には、少しの拘束も受け入れない自由な対処のしかたがみられている。すなわち何んらかの表現活動として過去の創作経験に直接つながり易い身近な題材に接した安易さが、各個人に理解されて直接構成法に結合できたと考えられる。このように誰にでも取り組める程度の題材に対しても、内容設定に直面する場合は身体表現活動の特性を考慮して、グループ活動によって完結する作品としての全体性に関する見透しを確実にする必要がでてくる。

次に内容決定の実態から考えられる問題点をあげてみる。

ア 「貝の夢」を包括的課題として取り扱いグループの題を決定した作品——② ⑥ ⑦

イ 作品として一応構成ができている作品——① ② ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

ウ 内容を概略的にとらえた作品——① ② ③ ⑤

エ 内容構成が創作作品として充実している作品——⑨ ⑬ ⑬

オ どちらかといえば動きに転換しにくい内容である——③ ④

カ 役割決定を配慮にいれている内容決定である。——全作品

キ フレーズに展開できる具体的な内容をもっている作品——② ④ ⑥ ⑧ ⑨ ⑪ ⑫

ク 具体的なリズムパターンが考慮されている作品——⑤ ⑨

ケ 情景展開風な作品内容である。——⑧ ⑨ ⑫ ⑬

コ 内容設定が短かすぎて表現に転移し難い作品——⑦

サ 終止が統一している。終止型が容易にとらえられる作品——⑨ ⑦ ⑫ ⑬

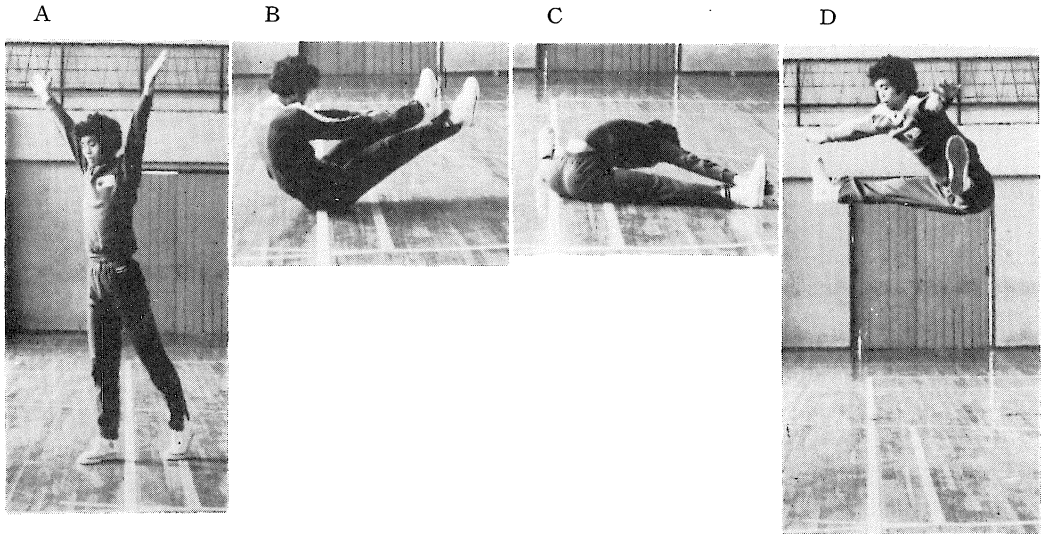
各作品毎に決定された内容中動きのリズム・フレーズ・役割・情景設定などに転移可能とみられる項目は5種類から23種類の巾をもち、平均13.3種類の項目が選択されている。

次にS45年度前期舞踊Ⅰの講義内容である自由課題による個人創作作品にみられる「内容のとらえ方」について述べる。

作品A 「若い力」

「内容」若さの特権であるジャンプ力、柔軟性、すばやい動作を表現したい。限りない若さの可能性を表わすため両手を上げ可能性を見出す様子を表現しA、次に若者の躍動していく様子をジャンプの連続Dで表わす。さらに進んでいくと若さの特権とも言える「悩み」にぶつかる。これを柔軟性B・Cをもって表わす。若さの特権の列挙で若い力を表わす積りです。

「若い力」

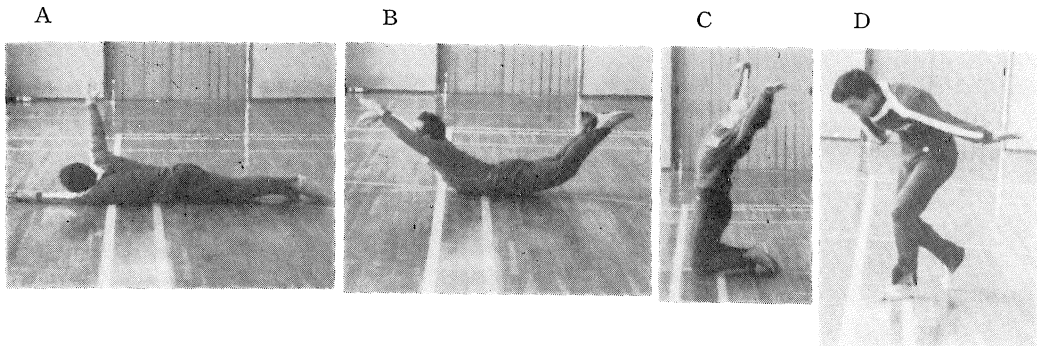


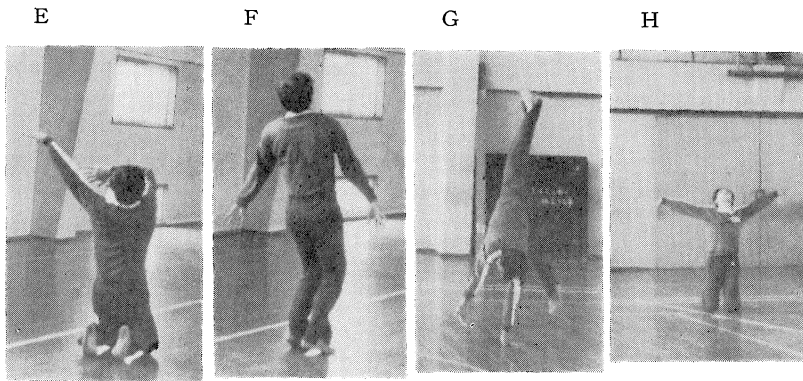
この作品は男子の身体的特性を考えて最も適格な題材を選択し、これを端的に表現した作品である。このような表現法は男子作品によくみられる表現法である。この種の作品を創作舞創として構成するには、動きのリズムの変化に加えて特に時間性が問題になってくる。そしてその所要時間を延長する手続きによって、運動の類似反復・漸進的展開、さらに変化へと継続して充実した創作活動へと近づくようになる。

作品B 「ハリケーン」

「内容」静かにシーンとした空・地、その空と地の間を異様なものが動き始めた。さらさら、さらさら。そしてその異様なものが突然暴れ出してくるではないか、暴れる暴れる騒ぎだてる、何もかもはちきれそう。然しその異様なものが次第に落ち付いてゆく。そして疲れ果てたか、どこかにすーと逃げてゆくではないか。

「ハリケーン」





これは完璧な創作作品で内容以上に細かいリズムパターンがとらえられ反復されるリズムが美事な漸進性をみせている。そして作品のやまには男子特有の側転を活用して力強さを強調させ、終止は落付いてゆく~~~~疲れ果てたか~~~~すーと逃げるという一連のフレーズをとらえて、内容以上の動きのリズムによる創作内容をみせている。また音楽的才能に恵まれた作者が、作品構成法を形式として理解している点も舞踊創作上に加味できたと認められている。

作品C 紫陽花

協調性をもっていそうな形なのに、どこか冷たく閉ざされている。柔かそうなのに固く閉ざされている。溶けそうなのに一歩中へ入るともう閉め出されそうになる。何かを求めているのに自ら飛び込むのを怖がり、自分から眼を閉じ求めるものから遠ざかろうとする。自己顕似が強いと思う。それは花一つにも表われていると思う。遠くからみると一つの大輪なのに近くから見ると小さい花の集まり、その小さな集まりは自分というものを冷やかに表面へと現わしている。移り気なとか花言葉で言われているらしいが、寂しく求めることさえ拒否する孤独な花という気がする。多分に私の主観的要素が入り込んでいるが、私のみだ紫陽花の心はこれ以外にない。思い出深い花であるが花そのものでなく憂愁性を表わしたい。

これは花に対する特徴のとらえ方が、協調→冷たい、柔らかい→固い、溶けそう→閉めだされる、求める→遠ざかるなどと抽象性が強くでている。然しこの多様なとらえ方が最終的には憂愁性として固まり、次ぎには女性の身体的特性である「まろやかさ」「やさしさ」「明かるさ」を浮き出させて優美な紫陽花の表現創作となった好例である。また私の観た紫陽花の心はこれ以外にないと見極められた題材をもった事態が、よい創作活動を可能にする原動力になっていると考察できる。

作品D 憤満の蓄積

押さえつけられてもう小さくなることができないところまでいった。押さえつけられてもう追いつくところがないまでに追いつめられてしまった。この圧力は何んだ、何がこんなに私を小さくするか、追いつめるか、どうして、何が——ああ何が、ちくしょうめ、追いつめてやる

逆に追いつめてやる。この怒りをぶつけずにおくものか、闘うぞ、闘わずにおくものか。

作品E 非 難

苦惱でいっぱい、そっと頭をもたげてみる。だめだ、誰も援けてくれない、返ってくるのは非難の声のみ、思い切って全身でぶつかって援けを求めている。気が付いてみると何処にも非難の声はない。少しおどけてみる、誰も非難なんかしていない。あとはただ喜び、よろこび。

作品 DEの二作品は文章表現と身体表現が同時的であったとみられ、書きながら動き、動きながら書いた文章が内容となって適切に創作された例である。これらは内容のもつ上昇線がその儘動きのモチーフを生み、さらに種類の発展展開を重ねて、文章のもつリズムが動きのリズムへ容易に転移してゆくという見方もできるのである。

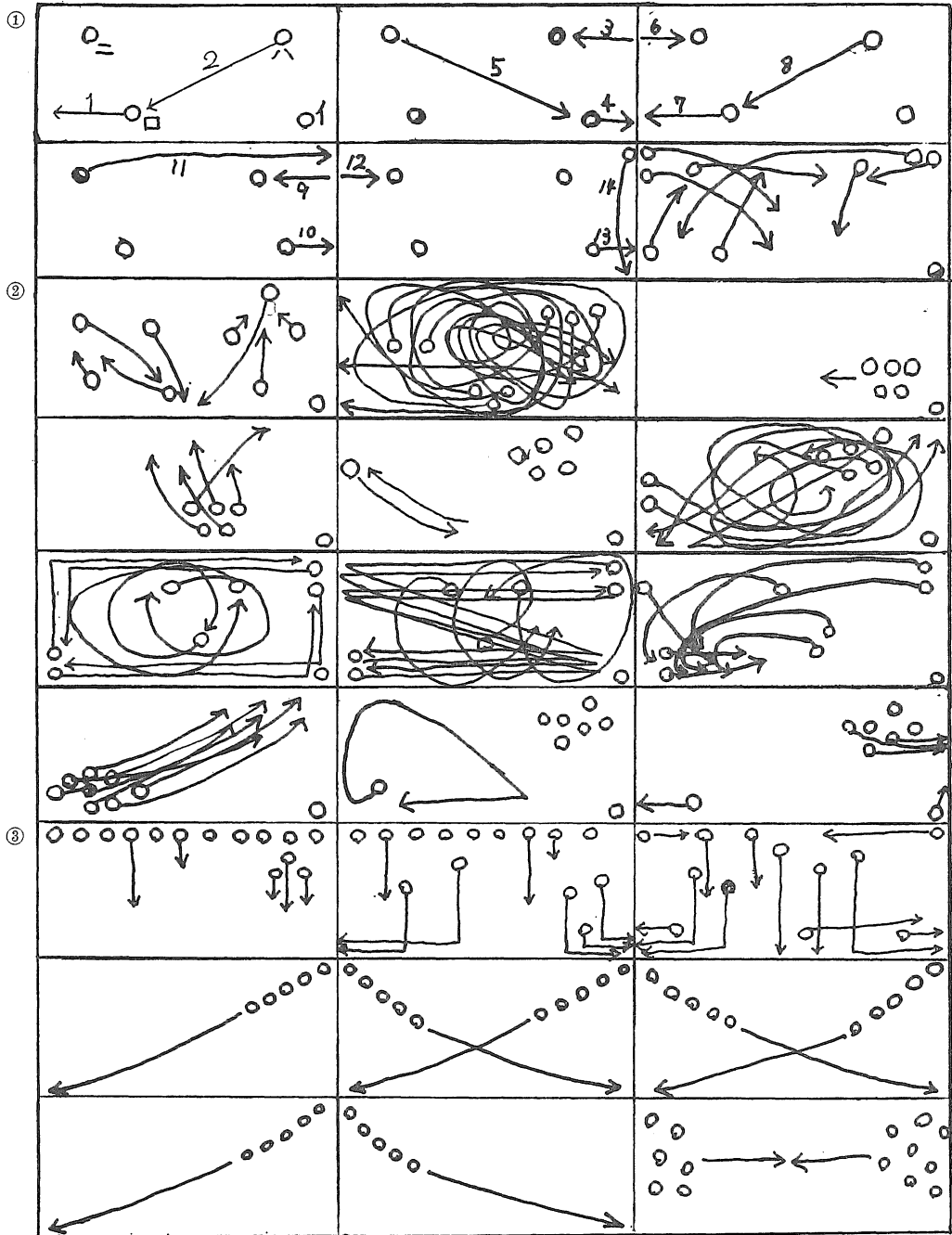
〔3〕 創作の手順をふまえた作品構成過程について。

島大創作舞踊研究班は公演に際する大作の創作は四回生が当たっているの、第一回独立公演は一応六名で創作し、第二回公演は二名がこれを担当している。

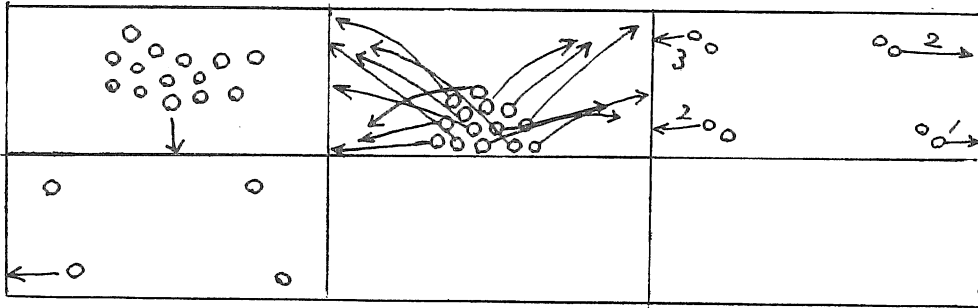
作品I 「死にゆく人々の空間」

二表 四人の個の動きは三様の水準の変化による 同一場所における動きで、死を待つ 悶えに対するイメージがそれぞれ異なる点を逆に活用し、個性を生かして統一を図ったプロローグである。モチーフはそれぞれ異なり、イは同一フレーズを方向を変えて三回反復する間に、ロは同一フレーズの過程で方向を変化させて二回反復を行なっている。ハニは同一の水準から同一フレーズを二回反復している。四つのフレーズは全く異なる長さを持ちながら、同型のリズムパターン ♪♪ を備える型によって纏まりの方向を強くしている。Moderato による呼数は64呼間で引き続き漸進性の強い歩に連続している。この漸進的な作品構成法は次の表によっても推察できるように、作品内容のとらえ方の典型的一方向を示めしていると言える。

二表 A ①の数字は移動順



二表 B



三表

「二表」のフレーズ展開順

	同 一 場 (モチーフ)	漸 進 的	類 似 的	急進的变化	反 復
一 部	1	2	3		
		4.5.6			
		7.8			9
		10.11		12	
				13	
		15	14	16	
二 部		17	18		
	1	3.4.5	2	6	7.8
		10		9	
	11	12			
	13				

次表四は人員を主にした空間構成を示めしているが、舞台のように広い空間であれば、その空間に相当した員数が必要になり、その員数が制約を受けている場合は、これを補う手法が必要になってくる。また大作であれば時間性を潤拓にする手法が重要になってくるのである。

四表

「二表」の人員による空間構成（数字は回数を示めす）

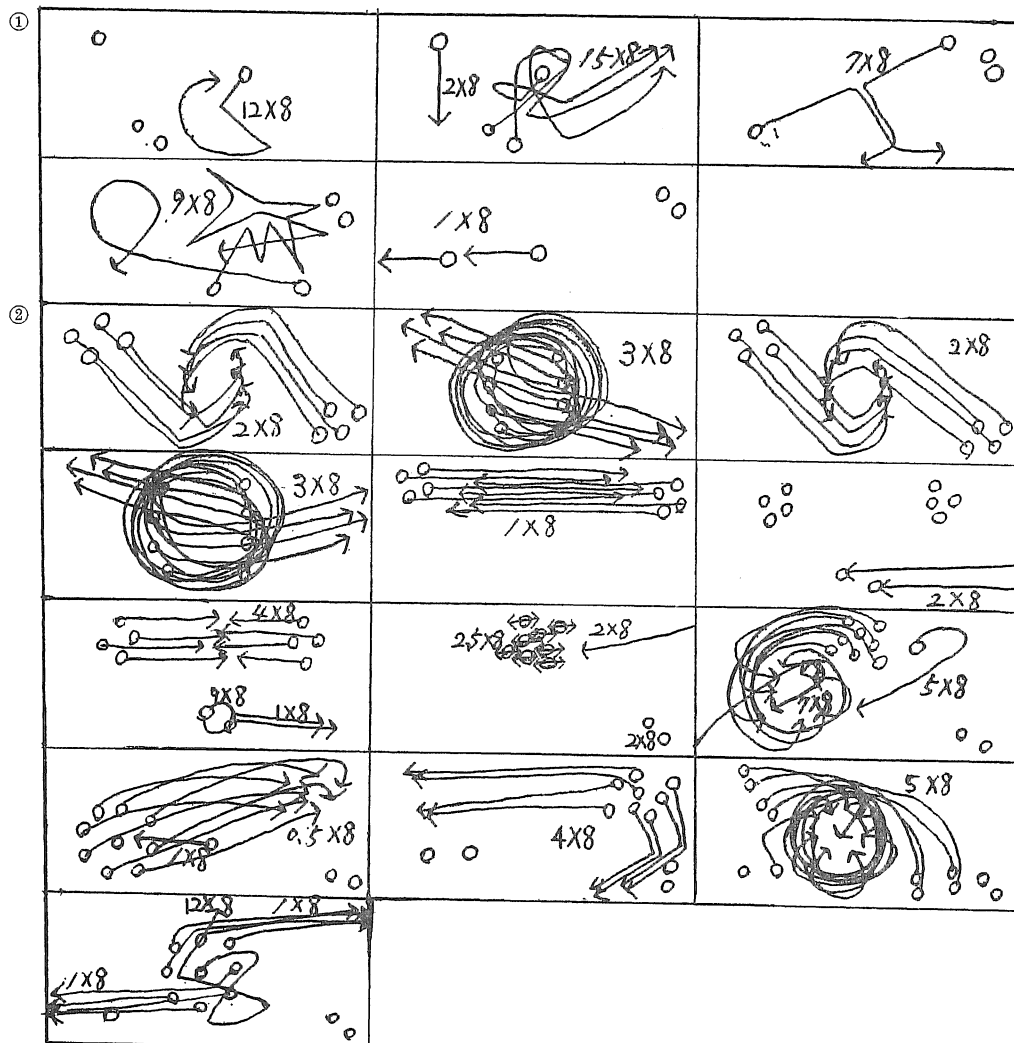
個の離散	個の移動	密集と個 (静止)	密集と個 (動く)	群(移動) と個	二点と群	三点と個	二点と 群と個	ソロと 群と個	三点と群	離 散
9	2	6	2	4	4	1	1	3	3	2
三群と点	四群と個	並列と個	並列と二 つの個	離 散 (並行)	二 群	四 群				
1	1	1	1	2	6	1				

この作品に対しては、死に対する哲学的考察に欠けるという島大一学生の手厳しい批判もあったが、一般的には内容89%，照明71%，衣裳71%と肯定的態度で鑑賞している。

作品B 「族」

五表

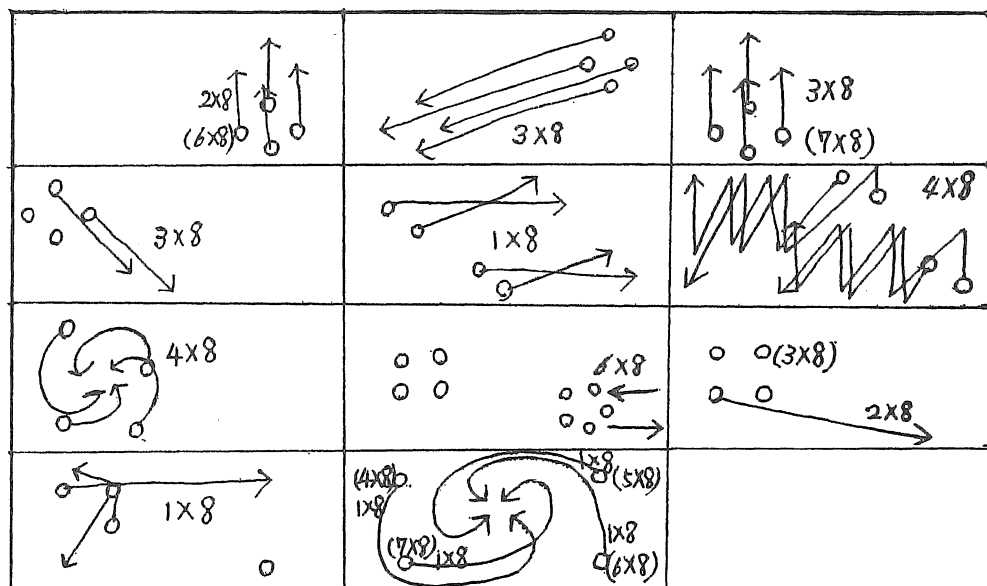
数字=拍数



有名な「リア王物語」に取材した作品で、一部は王と長女・次女・三女の心理的葛藤を構成内容としている。二部は群衆と長女・次女のからみ合いから三女の悲劇的な出来事へと展開される内容を創作している。これらの舞台公演では中間の休憩までの一部公演に対しては、多くの評価・批判・激励が寄せられているが、二部に対しては極めて低い回答率に終わっている。この作品に対しては音楽・照明・衣裳その他に関する批判的な内容は少なくなっている。

作品C か す り

六表

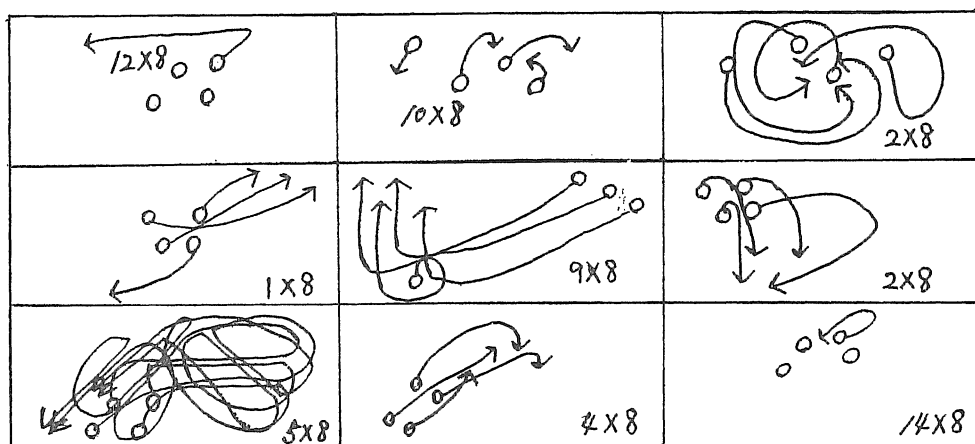


紺の題材は創作題として取りあげられている例をよくみる。機械的に織られてゆく紺織そのものの工程が、作品構成の変化発展に関連できるとも考えられ、また紺模様の種々ある変化そのものが動きのリズムパターンの変化に移行し易いとも考えられるからであろう。

表にみられる移動経路自体にも、作品構成作品内容の特徴が現われている。この作品内容に対しては肯定66%に対し批判的な内容は34%、照明に関しては肯定80%、衣裳に対しては肯定64%・中間的批判18%・批判的な内容は27%となっている。

作品D 炎

七表



現在の体育専攻生を中心にした二回生が、秋の大学祭に発表する目標をもって創作された作品である。この作品には創作初期の段階にみられる移動経路の単純構成が特徴のひとつになっ

ている。然し動きのリズムは優れた要因が多く、全身的な活動・弾力性をもった屈伸や跳躍・身体の部分を強調したアクセントが生かされて、躍動感に溢れた作品が創作されている。創作者達は同一学年の入部者であるが、珍らしく共通点の多い身体プロポーションをもつ実際から、技術水準を高める素質を十分備えているとみている。鑑賞眼が次第に厳しくなっていく傾向のなかで、作品創作は困難な活動条件が次第に多くなる現状にある。これに対処する方策のひとつに身体性に関する考察も重要になると考えている。すなわち或る程度完全を期する作品構成過程においては、演技者の身体的素質は勿論のことで、細部にわたる動きの特徴的な事柄に対する理解のもとに、一層充実した内容提示に備える必要を痛感している。

[4] 創作舞踊公演に際する一般的鑑賞の視点について。

八表 一般的鑑賞の視点

数字=頻数

() 内は第二回独立公演のアンケートより

分 類		肯 定 的	中 間 的	批 判 的
項 目				
全 般 的 観 点	激 賞・激 励	38 (7)		
	練 習 量	(1)	1	1 (2)
	作 品 全 般	(3)	4 (1)	7
	員数・空間構成	(2)	2	
	作 品 構 成		3	
	題 材		3	
	時 間 構 成		1	
動 き に 関 する 内 容		13 (97)	2 (14)	9 (34)
衣 裳		4 (43)	7 (22)	2 (12)
音 楽		6 (8)	3	2 (5)
照 明		2 (64)	(10)	(11)
ブ リ ッ ジ				3
場 内 放 送			3	
場 内 照 明			2	1

第一回独立公演はS45年2月に実施され、第二回公演はS47年6月に挙行している。最初の公演では、公演に関する総べての条件に対する批判を知るねらいをもって、アンケート(回収87名)は自由記述の形式をとった。第二回次は各作品に関して主に音楽・作品内容・照明・衣裳の四項目を設けてアンケート用紙を作製した。この結果、第一回と比較した場合は或る程度鑑賞視点の変容がみられているとも言えるが、創作課程を理解したうえでの確かな批判はなかなか見当たらないのが現状である。これまでの創作舞踊公演を鑑賞する機会の余りに少ない現状においては、表面的な鑑賞の域を脱し切れないのが普通であると言ってよかろう。然し今一つ、本当の意味の一般的鑑賞者を一人でも多くする方向への努力を忘れてはならないと考えている。

九表 「花」の題材にみられるリズム・フレーズの展開法

類別 班別	反復法	漸進法	類似法	急進的変化	リズムパターンの連続型
①		2		1.3	A A' A' B
②		1.2.4	3		A A' A' A' B C C' A'
③	3	2.4		1	A B B' A C
④		1.2.3.4			A A' A' B B' C
⑤	4	1.2.3.5			A A' B C C' C C'
⑥			1.2.3	4	A A' A' B B' C
⑦	4	1.2		3	A A' A' B B' B' A''' C C' D A'''
⑧				1.2.3	A A' B C A'
⑨	8.9.10		3.4	1.2.5.6.7	A B C D D' D' B' E B
⑩	4.7		1.3.8	2.5.6.9	A A' A' B B' C D A' A' A'''
⑪			3.6	1.2.4.5	A A' A' B A''' A' C C'
⑫	6.8		1.4.5	2.3.7	A B C D E F F' F''
計	16.9%	23.1%	22.0%	38.5%	

IV 考 察

研究の過程のなかで考察を加えている項目が多いので重複を避けて特に研究 (1)について述べる。

作品構成のなかで重要な要因のひとつであるリズムパターンのとらえ方は、確かな手法によると考えられる。これは身体的自己表現能力の技術が漸次豊かになる発達過程にあるからとみられる。このリズムパターンを基礎にしたフレーズの纏め方も、確かな表現技術として認めることができる。しかし次の段階である「フレーズの進展法」に問題点が多く残っている。

① 各作品題材によるフレーズの反復回数・反復方法は、その題材の性格と題材に適応した内容のとらえ方によって異なってくる。また内容のとらえ方は各生徒の創作経験、初歩的技能（小学校中学年）基礎的技能（小学校高学年）の学習状態・各グループ間の人間関係の実態・全般的題材の消化能力などによって、そのとらえ方の深さや広がりも図る必要が生じてくる。

② 類似的進展性は群の三要素的变化にみられるので、これを基底にした次時の学習計画が望ましい。然しこの三要素の類似的展開は、三要素的变化の目標によって導き出された偶然性が強いので、他の題材に容易に転移できる型態を通した練習のあり方が重要になってくる。またこの練習過程の継続によって、フレーズの独立性を緩和できるとも考察している。

(3) ダンスを創作作品に高める目標に近づくためには、作品の「やま」構成に創意工夫を重ねる必要がある。或るフレーズを「やま」に展開できる手法のひとつとして、制約された員数

をどう活用できるか、空間性・時間性の要因をどのようにどの程度に駆使できるかなどについて、急激的变化の要因に関する実証的練習法の研究も重要になってくる。

現在におけるグループ表現学習においては、題材決定後に細かく内容を検討しない場合でも相当豊かな作品構成が可能であると考えられている。然しその構成過程を分析する場合は、フレーズの強い独立性などの問題点を見逃す訳にはいかない。適格な表現の把握は「らしさ」を表現する模倣学習に始まり、「感じ」を表現する表現学習へと連続させて、昨今問題になっている「早づくり」の具体的方法論に結合できると考えている。そしてこの適格な内容の把握は他教科における表現学習活動とも関連させながら発達段階に適した内容構成法を確立させたいと考えている。

あ　と　が　き

「若い力」の写真撮影は小玉耕平助教授に依頼し、注1.2.3.の資料は島大附中教官団道子氏に提供して戴いた。第二回独立公演の作品創作担当者は特別課程体育専攻生佐藤美代子・小学課程体育専攻生杉原範子・第二回公演に関するアンケート作製者は小学課程数学専攻生（創作舞踊研究員）竹内三千代である。「若い力」は特別課程体育専攻生三年川畑茂君・「ハリケーン」は現都賀小学校金子司教諭である。

以　上